

小山崎遺跡

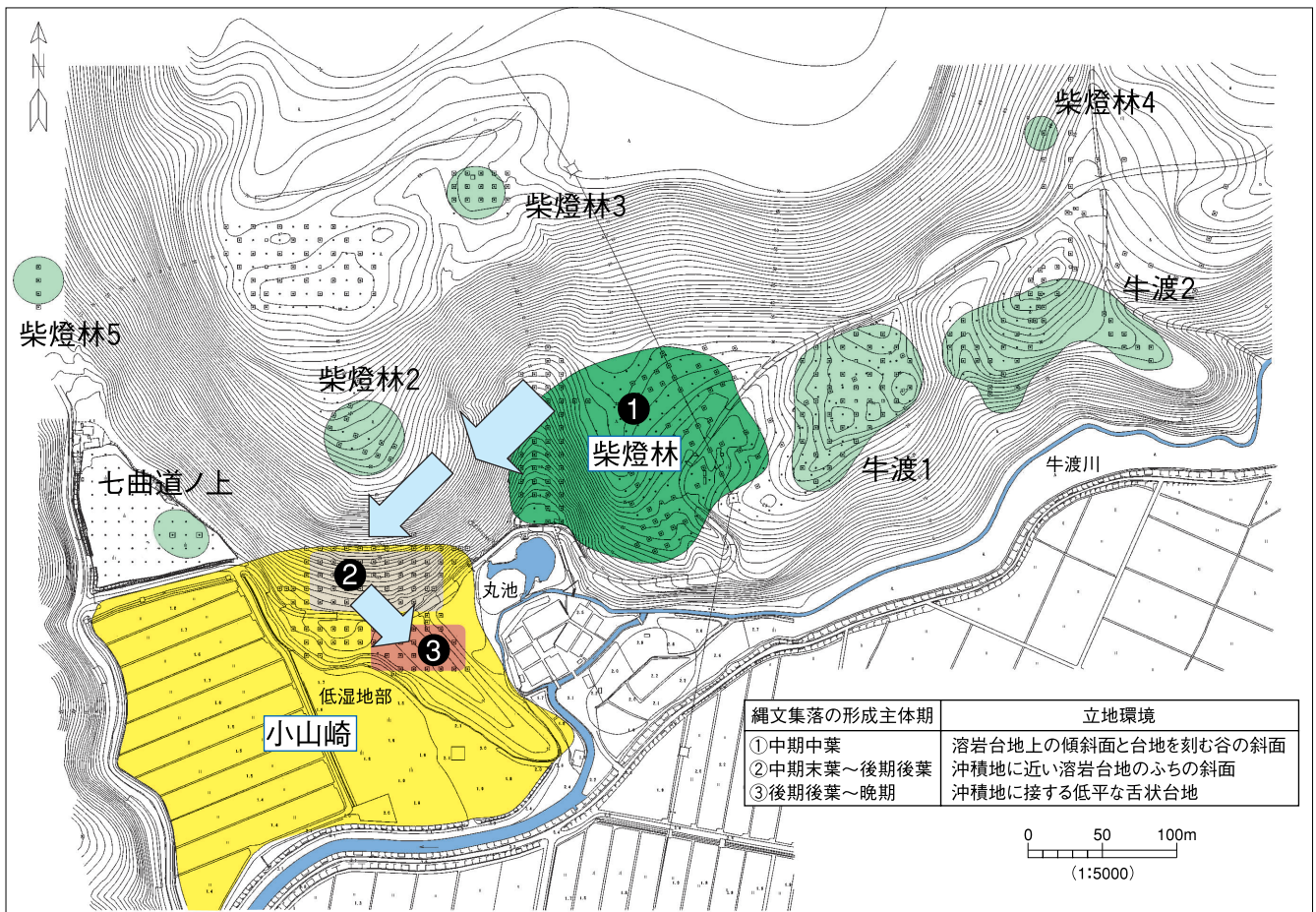
—KOYAMAZAKI SITE—

第16次発掘調査報告書



例言

- 1 本書は山形県飽海郡遊佐町吹浦字七曲・七曲堰ノ東・柴燈林ほかに所在するこやまざき小山崎遺跡の第16次発掘調査の概要である。
- 2 調査は遊佐町教育委員会が主体となり、遺跡の居住域の様相解明を目的とし、国庫補助を受けて実施する継続事業（重要遺跡確認調査）の5年次となる。
- 3 調査地は山麓傾斜面地区を対象とし、集落の時期別の立地変遷の解明を目的としている。
- 4 現地調査は8月3日に開始し12月11日に終了した。実働は67日間である。期間中、10月19日に日本考古学協会山形大会見学会、11月12日に現地説明会を開催し成果を公開している。
- 5 発掘調査の体制は、主体の遊佐町教育委員会が小山崎遺跡調査指導委員会を組織して、発掘・整理・報告書作成までの実務にあたった。体制は下記の通りである（敬称略）。
 調査総括 那須栄一（遊佐町教育委員会教育長）
 主任調査員 佐藤禎宏（日本考古学協会員・山形考古学会会長）
 調査員 大川貴弘（教育委員会生涯学習係主事・一級考古調査士）
 調査指導 文化庁文化財部記念物課・山形県教育庁文化財保護推進課
 現地指導 渡辺丈彦（文化庁記念物課 埋蔵文化財部門 文化財調査官）
 調査指導委員 渋谷孝雄（山形県教育庁文化財保護推進課 課長補佐）
 阿部明彦（財団法人山形県埋蔵文化財センター 調査課長）
 事務局長 鍛形修一（教育委員会教育次長）
 事務局 菅原善子（生涯学習係長） 大川貴弘 齋藤智恵子（同係主事）
 土門加代子（生涯学習係臨時職員）
 調査協力 阿子島 功 菅原富美（土地所有者） 箕輪鮭漁業生産組合 山形県庄内総合支庁
- 6 調査区の座標値は公共座標（旧日本測地系X系）に準拠し、Y軸は真北方向を示す。
- 7 検出遺構・遺物の略号は次のとおりである。竪穴住居跡(ST)、柱穴(SP)、土坑(SD)、その他の遺構(SX)、土製品(RP)、石製品(RQ)
- 8 掲載挿図には、各図にスケールと縮尺を付している。
- 9 本書は佐藤禎宏と大川貴弘が協議し、大川が執筆・編集を担当し、佐藤が監修した。

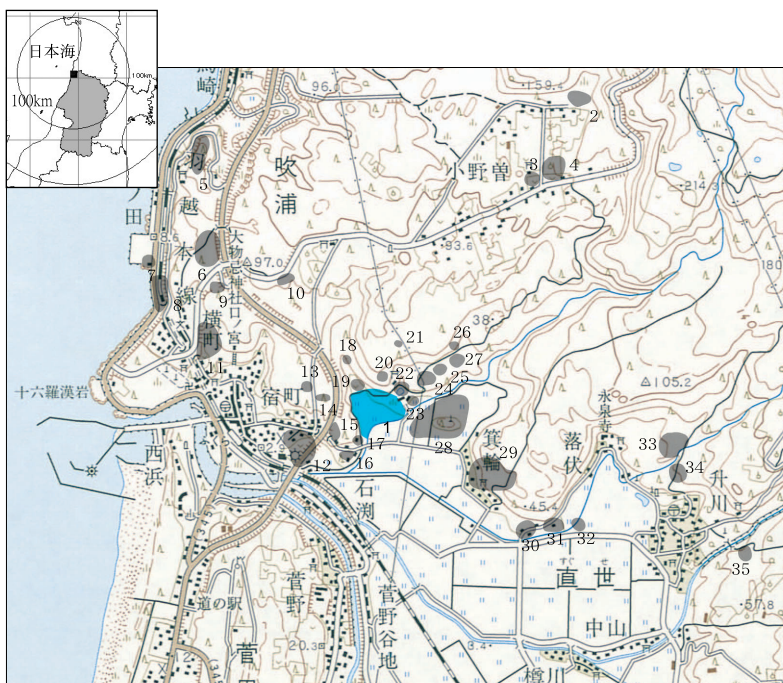


▲5 小山崎遺跡周辺の地形と主要な遺跡の立地変遷

I 環境と遺跡の立地

日本海より聳える鳥海山（2,236m）を仰ぐ遊佐町は総面積208.41km²を測り、庄内地方北端に位置する。鳥海の南西麓一帯や平野部の河川沿いの自然堤防上には、207カ所（平成17年11月現在）の遺跡が確認され、広域合併以前の北庄内の旧自治体では最も遺跡の登録数は多い。最古の遺跡は後期旧石器時代前半期に遡る。特に山麓部に展開する縄文時代の遺跡は114カ所を数え、55.1%に達する。次は42.5%を占める律令期の出羽古代集落であり、両時代で登録遺跡の9割以上となる。中世鎌倉期でも出羽留守所との見解がある大楯遺跡の存在が示すように政治的に重要な地域に発展している。一方、弥生～飛鳥時代の遺跡が極端に少ないが、地中深くに埋没し、未発見の可能性がある。上記の様相は、自然環境は無論、吹浦の港湾機能を含めた南北交通の要衝的地理要因と、一ノ宮を擁する古代～中世の出羽国政の反映の結果と言える。遺跡付近は庄内平野最北に位置し、縄文時代には日本海から入り込む潟湖の縁辺として外洋に通じていた。現在では河口部まで直線距離で1.6kmを測る。周囲は鳥海山の裾野が平野部と接し、湧水源が周囲に点在し、南方遙かに月山を望む。所在地の地籍は遊佐町吹浦字七曲、七曲堰ノ東、柴燈林他である。遺跡範囲は東西300m、南北200m以上に及ぶと推測され、面積にして約60,000m²と把握される。現在までに周辺部を含め約4,800m²の調査を実施している。小山崎の名称は箕輪鮭人口孵化場の西に180m程の長さで伸びる標高6m前後の低平な舌状台地の俗称である。台地周囲には低湿地帯が形成され、早期から晩期に至り、最深部は海拔0m以下となる層厚2.5m以上の動植物遺存体を含む包含層が、平均水温10°Cの安定した地下水位に保存され、当時の環境、植生、生業構造等を復元可能な資料が出土している。

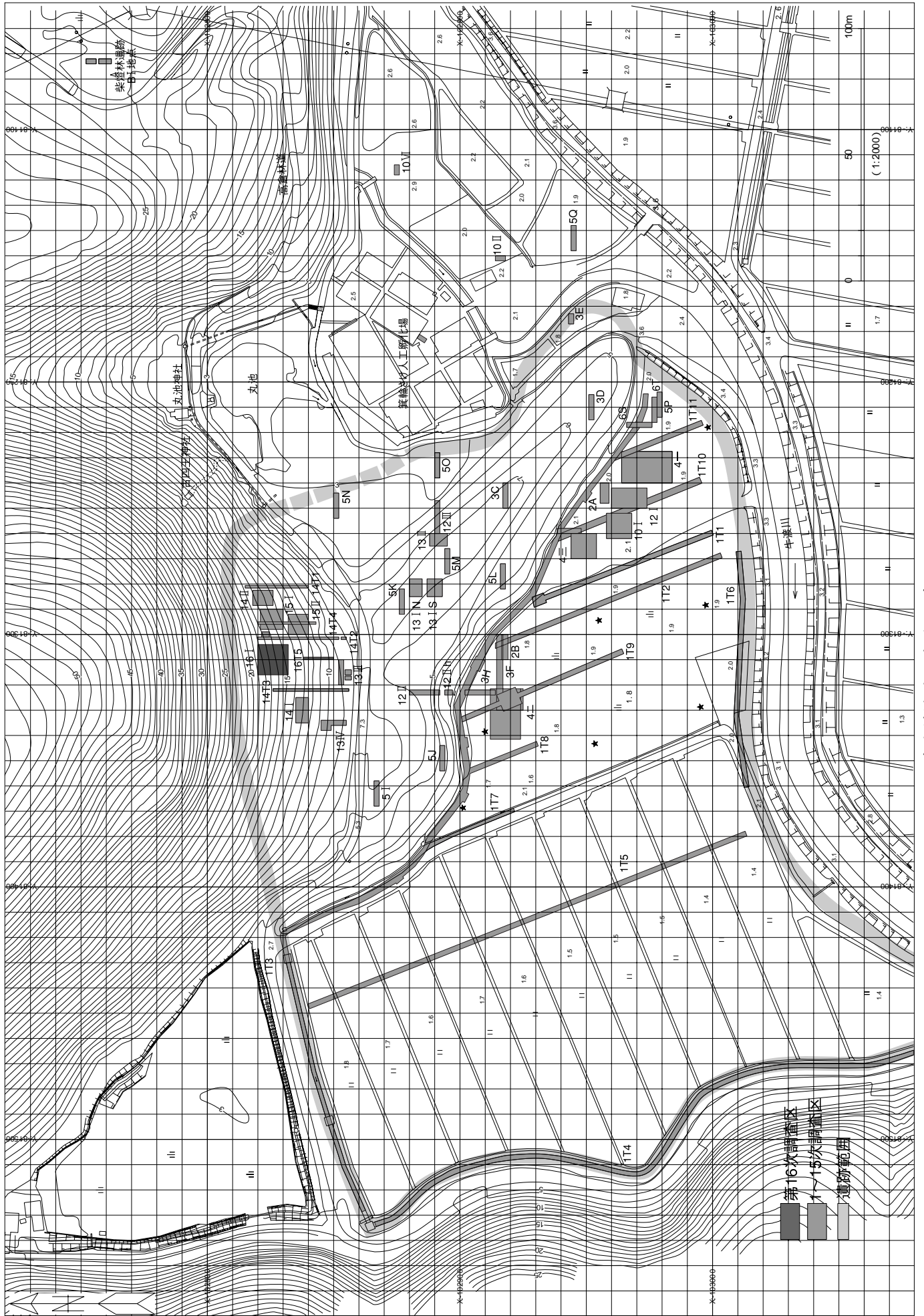
周囲の溶岩台地上には小山崎遺跡と密接な関連を持つ縄文遺跡が散在する。西方0.7kmの県指定史跡の吹浦遺跡（前期末～中期初頭）は環状集落内に多量の貯蔵用の土坑が出土している。北東台地上で小山崎遺跡と接する柴燈林遺跡は分布調査の結果、中期中葉の規模のある集落跡であることが判明し、新潟県域信濃川流域より搬入された火焰型土器も出土している。小山崎遺跡は、潟湖と外洋をつなぐ接点付近で形成される拠点的な3つの縄文遺跡群として互いに関連を持ちながらも、縄文期を通して盟主的な集落としての地位を保ち存在し続けたと考えられる。



周辺の縄文遺跡

番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	小山崎	19	七曲道ノ上
2	小野曾C	20	柴燈林2
3	小野曾A	21	柴燈林3
4	小野曾B	22	丸池
5	湯之田山	23	荒川
6	小屋林道西	24	柴燈林
7	釜磯	25	牛渡1
8	南光坊坂	26	柴燈林4
9	小屋林道東	27	牛渡2
10	ムジナ堂	28	舟森
11	小長坂	29	箕輪
12	吹浦	30	下山
13	大黒坂	31	笹淵
14	物見峠B	32	目倉神
15	物見峠A	33	小倉向
16	小谷地	34	山居
17	物見峠C	35	川東
18	柴燈林5		

▲6 吹浦地区の縄文遺跡（国土地理院地形図1/50,000「吹浦」に加筆）



▲7 小山崎遺跡の地形と調査区

Ⅱ 調査の経過

小山崎遺跡の片鱗は明治期から知られ、丸池周辺採取の石器が羽柴雄輔により紹介されている（『東京人類学雑誌』1892）。戦後、西方0.7kmに位置する吹浦遺跡で1951年より県内初の発掘調査が実施され、報告書（『吹浦遺跡』1955）の中で、小山崎を含む周辺5遺跡が明示されて以来、周知の遺跡となった。近年、県営圃場整備事業を契機に第1次調査（渋谷1995）が実施され、縄文時代早期後葉から晩期中葉に至る約3,800年間の動植物遺存体を伴う遺物が層位的に確認された。長期の年代幅で有機遺物を伴う遺跡は県内では皆無であり、県教委は保存目的の重要遺跡確認調査として、2002年の第7次まで継続調査を行った。発掘により、掘立柱建物遺構（2次A区）、多量の敷石（道）と打込み杭で構築した水辺の遺構（4次Ⅱ区）や小貝塚（6次T区）等が発見された。優品も多く、長期の土器変遷は無論、建物上屋の構造材や丸木弓、舟の櫂、漆器や骨角器、木製品等が揃う。最古の木製品は前期前葉に遡る。生業関連の情報も豊かで、前期前葉のドングリのまとまりや中期まで伴う動物遺存体を基に、前期～晩期までの食生活、環境変遷の復元が可能となった。

遊佐町は保存・活用の観点から、低地部11,307㎡を2004年に公有化した後、03年の第8次調査より調査主体となり、分布調査では東方台地上で中期中葉の柴燈林遺跡の存在等、周辺遺跡を明らかにした。05年からは国庫補助事業に着手し、居住域の確定を主目的に掲げた発掘を継続している。09年の第15次調査までに、山麓傾斜面で中期中葉から後期に至る段々畑状の集落を発掘している。特に中期末葉の複式炉を持つ集落跡は、大きく斜面を削平して水平な床面を造成した形の居住形態を明らかにした。

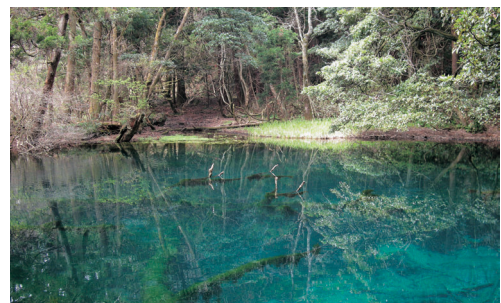
河口部に近い一帯では縄文時代を通し、小山崎遺跡を中心に拠点集落が時期別に近距離内で場所を変え繁栄する様相がうかがえる。前期末・中期初頭に隆盛した吹浦遺跡の後は東方の柴燈林遺跡が中期中葉に隆盛し、中期末葉に至り再び小山崎遺跡（傾斜面地区）が拠点集落化する様相が判明している。

本16次調査は国庫補助を受けての継続調査5年目にあたる。斜面居住域において後期集落の立地が予測される地点で、下記の規模の調査を実施した。

第Ⅰ調査区 予定面積 144㎡ 精査面積 144㎡
第5トレンチ 予定面積 12㎡ 精査面積 12㎡



▲8 小山崎遺跡全景（←西） ①低湿地区・②斜面の居住域
③柴燈林遺跡



▲9 丸池(国指定史跡:2008.3)



▲10 日本考古学協会見学会(2009.10.19)

Ⅲ 本次の調査目標と内容

本次の調査期間は5ヶ月間の長期に及び、実働は延べ67日間に達した。平面的な156㎡という面積よりも、下記の2大要因が影響した。一つは現地環境にあり、斜面地の杉林内で抜根と安山岩巨岩の除去に終始せざるを得ない悪条件が影響した。次に最大の要因である堆積層の深さである。最大約2mに達する深度は過去の周辺部トレンチで予測済みではあったが、人力の掘下で全廃土を高さ3mを超える土嚢積みで処理した。土嚢壁が調査区周囲を完全に覆う光景は県内でも類例を見ない作業となった。

調査は、保存目的を大前提に、遺構検出面まで掘下げた後、各遺構を50%ないしは25%の最低限の掘削により精査し、遺構の性格解明に努めた。期間終盤の文化庁担当官の指導もあり、第I調査区南側で新規トレンチ調査を期間を延長して実施している。また、本遺跡の調査では始めて詳細な遺構の3D計測を実施し、主な遺構等で年代測定用の炭化物を採取し、一部の測定値を得ている。

1. 第I調査区

第I調査区は2008年に縄文時代中期末葉の集落を発掘した地点の西側隣接地に設定された。安山岩の巨礫が散在する杉林斜面である。予定区内は過去の試掘では分厚い崩落土で掘下げが阻まれ、トレンチ調査も未実施であり、調査空白地として懸案となっていた。過去の一帯の調査結果を鑑みれば、予定区は後期集落の立地が濃厚であり、斜面地の時期別の集落立地変遷を解明する上で調査不可欠であった。左記の理由により、北東で解明が進んだ中期末葉期の集落に後続する集落の発掘を主目的として掲げた。調査面積は12×12mで実施している。

2. 第5トレンチ

第5トレンチ(5T)は第I調査区南側に設定された。傾斜面に直行する1m×12mの補足的な調査区である。当初予定にはなかったが、第I調査区南側の様相確認の目的で、調査終盤に実施している。南側は江戸期と推測できる土取の影響が地表面からも伺える状況であった。



▲11 I区北西部遺構プラン確認(←南)



▲12 斜面に構築した縄文後期遺構群(I区←東)



▲13 SM1配石遺構(←南西)



▲14 有脚石皿出土土状況

第 I 調査区検出の遺構



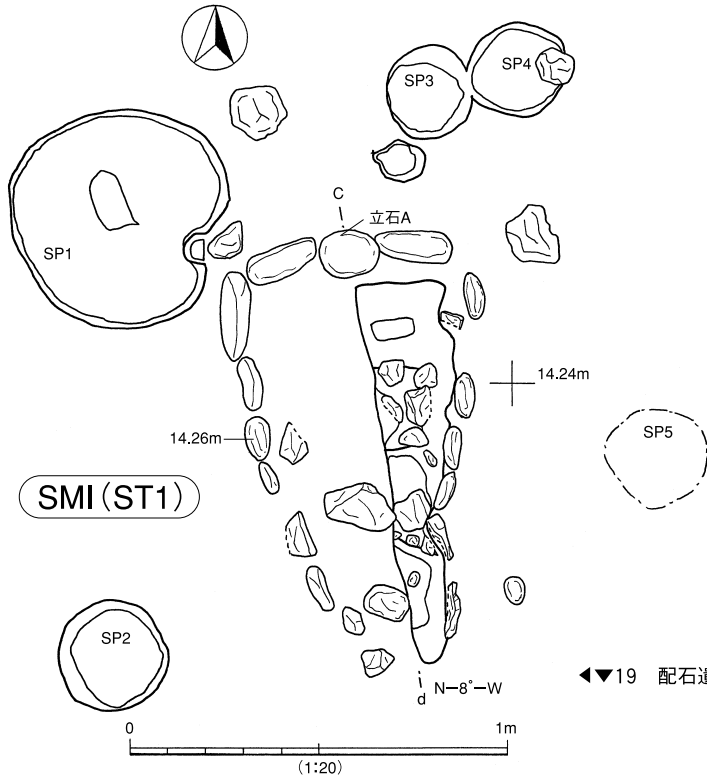
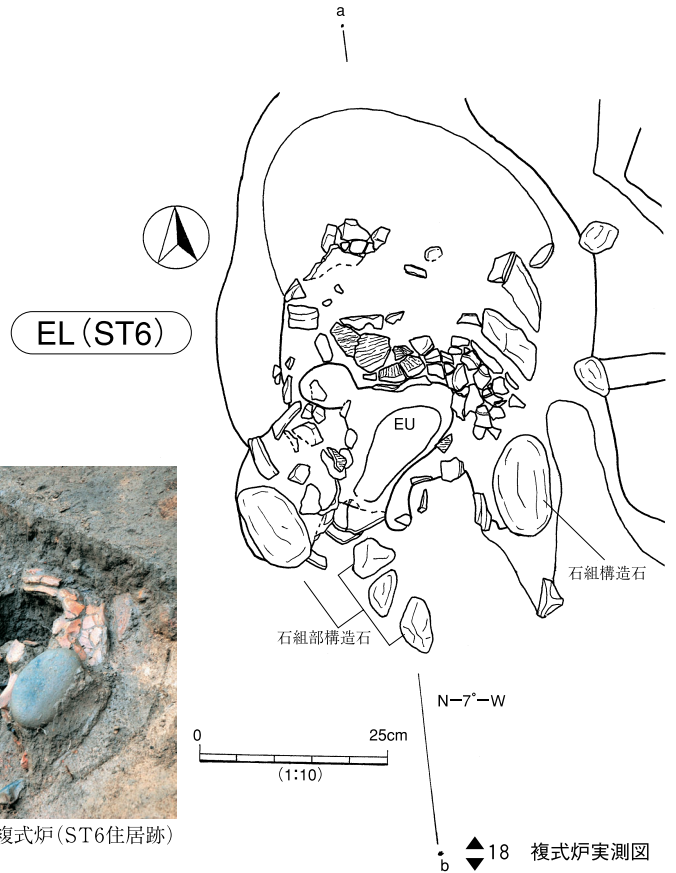
▲15 ST7小礫敷住居跡(←西)



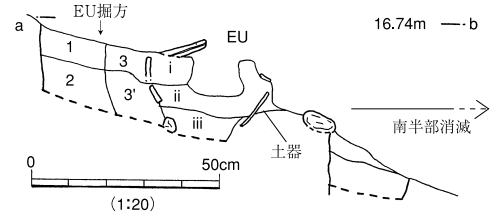
▲16 ST6住居跡(←東)



▲17 複式炉(ST6住居跡)



◀▼19 配石遺構実測図

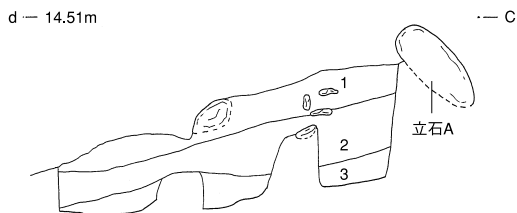


複式炉 (ST6-EL) a-b

1. 暗赤褐色粘質土 (炭化物、褐色小粘土粒混入。5YR3/6)
 2. 赤褐色粘土 (硬質。5YR4/8)
 3. 暗赤褐色粘質土 (焼土含む。暗赤褐色土15%混入。5YR3/6)
 - 3' 暗赤褐色粘質土 (シマル。5YR3/6) 3-3'層はEU掘り方。
- i. 暗褐色粘質土 (赤色焼土含む。2.5YR3/4) i-iiiは土器内埋土
 - ii. 暗赤褐色粘質土 (炭化物含む、シマル。5YR3/6)
 - iii. 暗赤褐色粘質土 (シマル) 強く微細炭化物含む。5YR3/6



▲20 SMI配石遺構(ST1住居跡)



配石遺構 (SM1) c-d

1. 極暗赤褐色粘質土 (微細炭化物、風化礫含む。5YR2/4)
2. 極暗赤褐色粘質土 (炭化物、風化小礫含む。ややシマル。5YR2/3)
3. 暗赤褐色粘質土 (炭化物、微量の焼土、褐色粘土粒含む。5YR3/4)

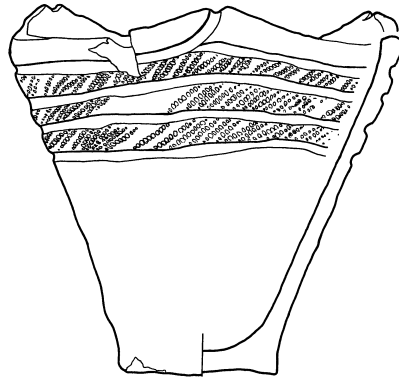


▲21 ST2住居跡(←南)

第 I 調査区と第5トレンチの主要遺物



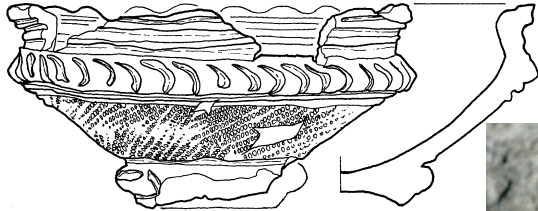
▲22 深鉢 RP181(1/2)



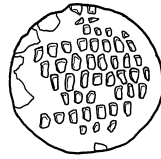
◀23 RP181実測図
器高 9.8cm
口径10.5cm
(1/2)



▲27 深鉢 RP180(1/2)



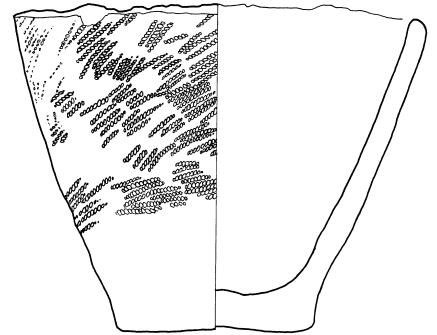
▲24 RP150実測図(1/2) 口径10.7cm・現高10.2cm



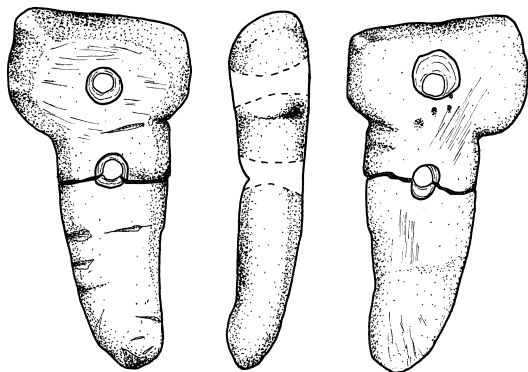
▲25 台付浅鉢 RP150(1/2)



▲26 RP180・181出土状況



▲28 RP180実測図(1/2)
口径13.6cm・現高10.7cm

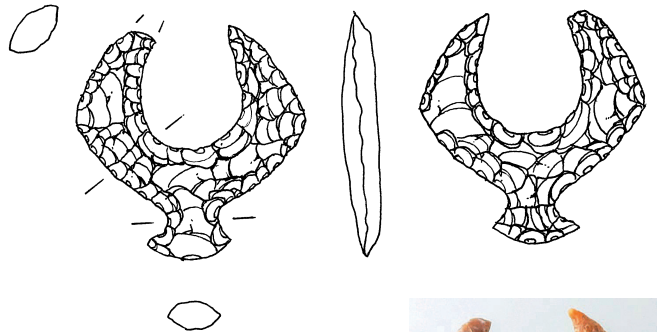


▲29 RQ84実測図 高さ9.6cm



▲30 装飾品 RQ84(1/2)

▼31 RQ26実測図 高さ3.1cm(1/1)



▲33 浮子 RP100(軽石製)(1/4)



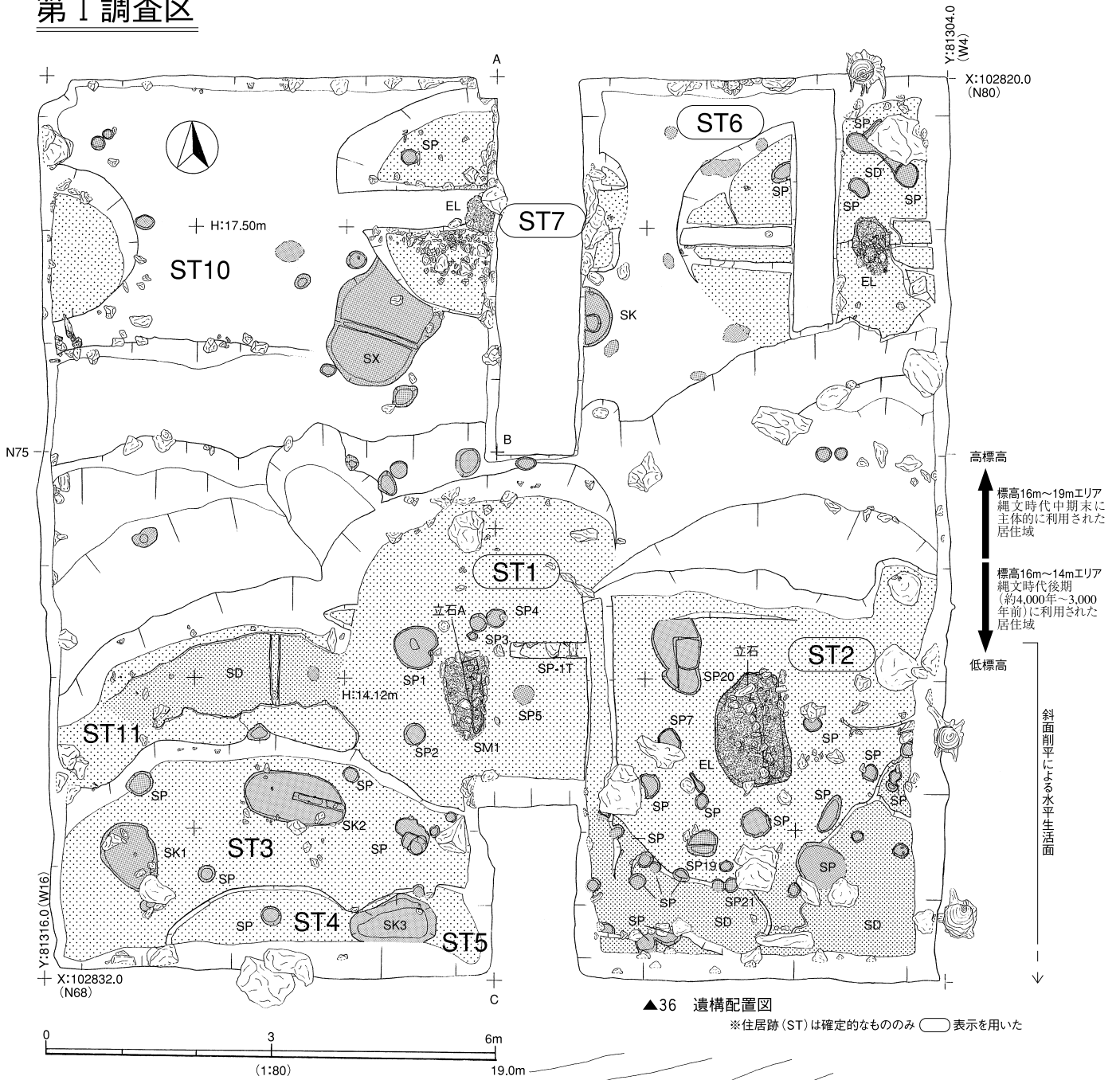
▲34 石鏃(アスファルト附着) 右の高さ5.0cm(1/1)

▶32 異形石器 RQ26(1/1)



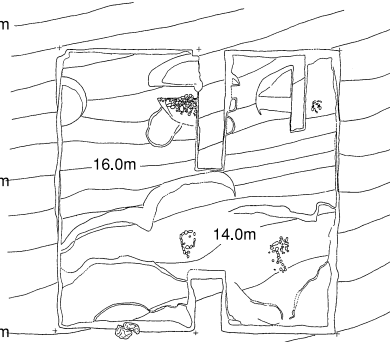
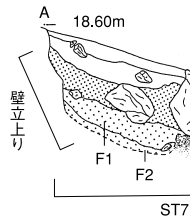
▲35 削器(1/2)

第I調査区



I区 南北ベルト西壁 A-B

- 1.黒褐色土(10YR2/3)
- 2.赤褐色土(5YR3/3)
- 3a.暗赤褐色粘質土(崩落土。安山岩破砕礫含む。ガリガリ)。5YR3/6
- ST7埋土-
- F1.極暗赤褐色粘質土(炭化物、遺物含む。粘性強く粒度均質。5YR2/4)
- F2.暗赤褐色粘質土(褐色粘土10%含むシマリ強い。床面直上。5YR3/4)

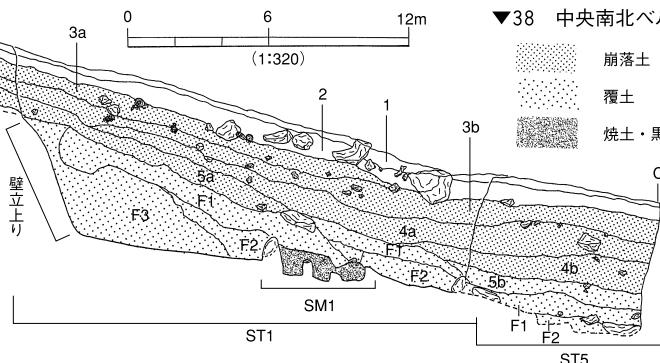
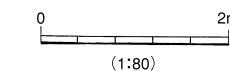


◀37 地勢図

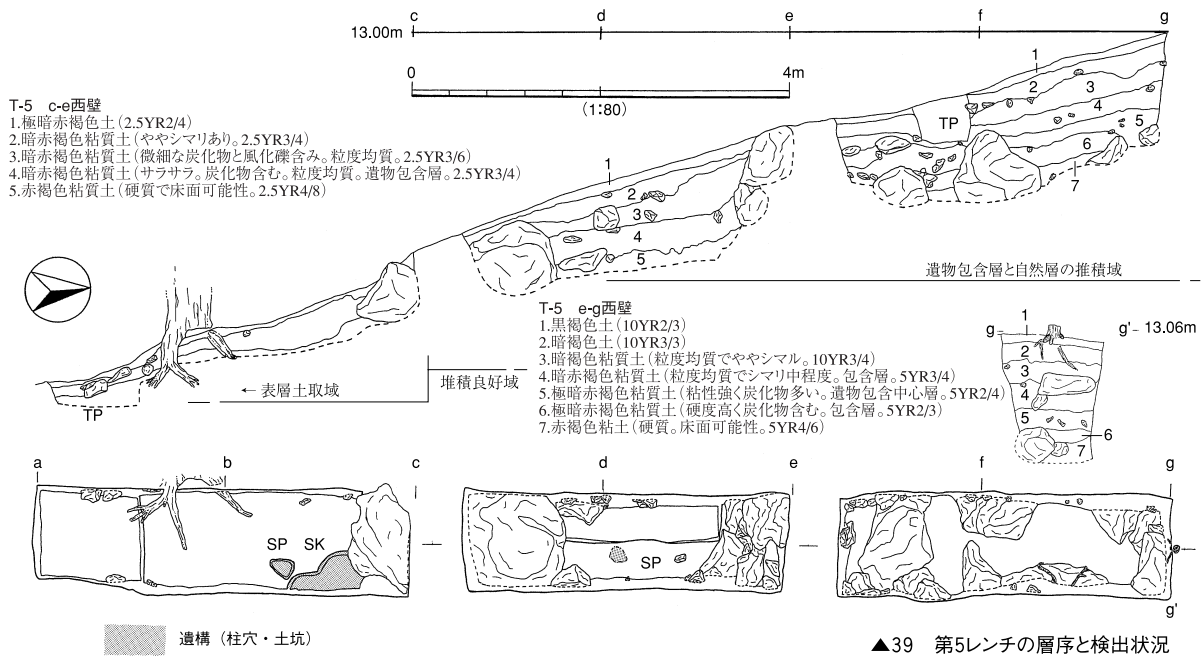
▼38 中央南北ベルト地層断面図

I区 南北ベルト西壁 B-C

- 1~3a.A-Bに同じ。崩落土。3b~4bも無遺物層崩落土。
- 5a.暗赤褐色粘質土(1cm未満の微細炭化物と粘土粒混入。5YR3/4)
- 5b.暗褐色粘質土(多量の炭化物含む。遺構検出層。10YR3/3)
- ST1
- F1.暗赤褐色粘質土(炭化物と褐色粘土粒含む。粒度均質。5YR3/2)
- F2.暗赤褐色粘質土(粒度均質。炭化物多く床面直上。配石検出面。5YR3/4)
- ST5
- F1.暗褐色粘質土(遺物、炭化物含む。シマリ弱い。10YR3/3)
- F2.暗褐色粘質土(F1より粘性あり)。小礫多い。10YR3/4)



第5トレンチ



IV 成果と課題

1. 出土した遺構

傾斜面 (平均斜度 16°) に設定した第 I 調査区全域で縄文時代中期末葉～後期全般に至る集落跡を捉えている。竪穴住居は、最高位 (床面標高約 16.7m) に築かれた中期末葉のST6を最古として、後期後葉に至るまで繰返し構築され、現段階で4軒の竪穴住居と住居跡可能性遺構を5カ所検出している。過去の隣接地のトレンチ調査も踏まえ、中期末～後期を通し少なくとも10軒以上の住居が構築されたことが判明した。時期が下った晩期中葉の遺物も散見されるが明瞭な遺構は不明である。住居群の構成は、中期末の複式炉を持つST6は、東側隣接地で15次調査で発掘した集落を構成する1軒と言える。一方、標高が下がる調査区南方は後期の主体的住居域として利用されていた。標高 16m を境に南方は地層が厚く (約 1.6m) 堆積し、広範囲に水平な生活面が広がる。時期差を持つ遺構が複雑に切り合う様相は、低湿地に面した斜面地への居住という限定された地形に起因するものであろう。調査区では、約 1m の深度で平安期 (9世紀中葉) の完形須恵器坏が出土し、集落を覆う崩落土の堆積が当該期以降であることを示している。

住居群の構築時期は、堆積土出土の土器形式からは、後期前葉から中葉を経て後葉の瘤付土器段階まで後期全般にわたっている。調査区の堆積層の断面観察では居住面造成に際して何段階かの切土作業を経て生活面を造成した様子がうかがえる。後期中葉と推測する住居ST1には河原石を並べた炉状を呈する配石遺構SM1が構築されているが、炭化物、焼土が少ないことと特異な北端の立石の存在から、儀式に係る遺構の可能性も考慮する必要がある。ST2は南側に多くの壁柱穴が検出された住居跡である。Pit19採取の炭化物の ^{14}C 年代測定値 (AMS) は $3,060 \pm 30\text{yrBP}$ の数値で後期後葉～晩期初頭の年代を示すが、出土土器からは後期後葉新地式期と推定される。ST7は出土土器から後期前葉期に構築されていた。南半分は基礎工事と目される小砂利を敷いている。斜面地の小砂利敷き住居は県内初検出である。

調査終盤、調査期間を延長し、調査区南側に傾斜面に直行するトレンチ調査 (5T) を実施している。トレンチ設定位置は、地表面の荒れの目立つ周囲の中で比較的自然地形を保つ地点を選択した。中間部より南方 (a-c) は土取の影響により包含層は欠落していたが、斜面上位の北方に向かい層厚が増えてゆく様相が観察できた。多量の安山岩の巨礫により包含層の観察は限定的ではあるが、トレンチ上部は、第 I 調査区から連続する後期の居住域に相当すると考えられる。出土物も若干の中期末の資料が混入するが、主体的な時期は後期であった。